様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１３１３４

研究課題名（和文）性的少数者の政治と多様な諸身体の連帯および共存をめぐる現状分析と理論構築

研究課題名（英文）Cultural analysis and theories of the politics of sexual minorities and the possible forms of coalition of various bodies

研究代表者
清水　晶子（SHIMIZU, Akiko）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：４０３６１５８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の性的少数者の政治言説を分析するとともに、個別の物理的身体をめぐる近接性の政治と「集団」における差異の政治とを接続しつつ、差異をもつ諸身体の共生と連帯の可能性を提示することを目的としたものである。具体的には、フェミニズム／クィアの政治が多様に異なる諸身体の共生と連帯をどのように模索したのか（あるいはそれに失敗したのか）を整理した上で、今世紀の日本におけるジェンダーとセクシュアリティの政治が女性や性的少数者の権利の承認を目指す中で、諸身体の差異をめぐる政治がどのように展開してきたのかを明らかにするとともに、マイノリティ身体にとっての近接性と連帯の困難と可能性についての考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、今世紀に入ってからの日本のジェンダー／セクシュアリティに関わる政治が、個別の身体の多様性を踏まえつつ、どのように展開されてきたのかを考察するものである。2020年に予定されていた東京オリンピックを前に、「女性」や「LGBT」の権利の法的・社会的承認を目指す言説が、そのそれぞれのカテゴリーを構成する多様に異なる諸身体の共存や連帯をどのように可能にし、あるいは制約してきたのかを考察することは、インターセクショナリティを踏まえた連帯を模索するより広範な社会理論構築の一端を担う、重要な作業である。

研究成果の概要（英文）：The research attempted to propose the possible ways of coexistence and coalition of variously different bodies. Specifically, based on the understanding of how feminist and/or queer theories and politics have sought to achieve coexistence and coalition of variously different bodies, the research reveals the ways in which the politics of genders and sexualities in 21th century Japan, in their attempt to gain legal/political recognition and equality for women and/or “LGBT” folks, have negotiated the issues of survive and work with non-normative/non-conforming bodies. The research also analyses the latest of these issues for Japanese feminism, namely the attack on transgender folks by some feminists, and demonstrates how the politics surrounding physical proximity and coexistence have been at work.

研究分野：フェミニズム理論、クィア理論、身体論、文化理論

キーワード：フェミニズム　クィア　ジェンダー　セクシュアリティ　近接性　連帯　身体

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

欧米先進諸国を中心に性的少数者の権利承認の進んだ今世紀、これらの承認が具体的にどのような差異をもつ身体にどう配分され、その中でどのような連帯が模索しうるのかは、性的少数者にかかわる運動と学問の上の大きな関心事であった。リサ・ドゥガンによるゲイ・アクティヴィズムにおけるネオリベラリズム批判、ジャスビル・プアやサラ・アーメッドによる人種主義批判、ロバート・マクルーアによる健常主義批判なとど、今世紀のセクシュアリティ研究の主要な議論の多くは、この流れに位置付けられてきた。同時に、これらをふまえ、具体的な個別身体の差異を出発点とした連帯の可能性についての考察もまた、クィア研究の重要な課題であった。

東京オリンピックを睨んで「多様性」の政治的効果に注目の集まる現在、これは日本の性的少数者の生と政治にも深くかかわる問題である。応募者はこれまで、現代日本の性の政治の分析から英語圏のジェンダー／セクシュアリティ理論を再検討すること、障害論とセクシュアリティ理論との交錯からみた〈3.11〉以降の日本のナショナリズムの分析、などに携わってきた。本研究は、それらをさらに発展させ、現代日本におけるマイノリティの政治を分析し、多様な差異をもつ諸身体の共生と連帯の可能性を理論的に追及するものである。

２．研究の目的

性的少数者の権利主張が国際的に急速な承認を得つつある現状を背景として、ジェンダー、 国籍、人種、民族、社会経済階層、健常性などをめぐって、性的少数者相互の、または性的少数者とそれ以外のマイノリティ間の差異に注目すること、さらに、そのような諸差異を内包した共生と連帯をめざす運動や思想を展開することが、強く要請されている。本研究は、「身体表面」「接触」「空間的距離と近接性」などのキーワードを通して、日本の性的少数者の政治言説を分析するとともに、ミクロな個別の物理的身体レベルとマクロな「集団」内/間のレベルを接続しつつ、差異をもつ諸身体の共生と連帯の可能性を提示することを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、研究代表者による関連理論文献の精読と検討、および日本の性的少数者の政治言説の収集と分析を通じて遂行された。

まず、フェミニズム、クィア理論が様々な差異のもたらす緊張をはらむ連帯をどのように思考し達成してきたのかを、先行する理論的著作の精読を通じて整理した。そののち、集団の政治における諸差異の共存と連帯の可能性の追及について研究を遂行し、「空間的距離と近接性」を鍵概念として諸マイノリティ集団内/間の差異を内包した共存と連帯の可能性を理論化する。日本の性的少数者の政治言説分析は 3 年を通して継続しておこない、最終年度はこれらの分析と理論構築をとりまとめつつ、フェミニズムが多様な身体の共存をどのように考えていくのかについて 2018 年以降世界各地で新しく注目を集めてきたトランス排除の言説の日本での展開を具体例として、共存と近接性の問題を新たに考察し直した。

４．研究成果

(1) まず、初年度には、身体レベルにおける諸差異の共存と連帯の可能性を探るための前段階として、セクシュアリティの表象に関してジェンダー 、人種、セクシュアリティなどの差異を孕む多様な立場からのフェミニズム研究における先行議論の蓄積、とりわけ 80 年代の「ポルノ 論争」をめぐる論争の要点を整理した(「ポルノ表現について考えるときに覚えておくべきただ一つのシンプルなこと(あるいはいくつものそれほどシンプルではない議論)」、『社会の芸術/芸術という社会』(北田暁大・神野真吾・竹田恵子(社会の芸術フォーラ ム運営委員会)編)フィルムアート社、2016 年、pp.151-74)。

並行して、90 年代の竹村和子の理論翻訳の詳細な読解を通じて、日本におけるクィア理論の導入期における「ジェンダーの政治」としてのフェミニズムと「セクシュアリティの政治」との緊張関係、及び「翻訳」という営為によってその緊張関係にどのような理論的/政治的介入が試みられていたのかを、明らかにした(“The Translation of Politics: Introducing Queer Theories to Japan”, Crossroads in Cultural Studies Conference 2016(国際学会))。また 、現在の渋谷区同性パートナーシップ条例に関わる言説を中心とする「LGBT 運動」について、欧米諸国における性的少数者の権利運動 、国内の「LGBT」政策、さらに女性政策との関係から考察を行ない、招待講演及び論文執筆を行った(「ダイバーシティから権利保障 へ:トランプ以降の米国と『LGBT ブーム』の日本」、『世界』2017 年 5 月号収録)。

(2) 続く年度には、集団の政治における諸差異の共存と連帯の可能性の追及についての研究を遂行した。とりわけ、8 月に開催した公開研究会では、日米の研究者、さ らに若い世代のアクティヴィストを招いて、日本におけるジェンダーの政治とセクシュアリティの政治との重なりとずれを確認し両者の共生の可能性を探るべく、今世紀初頭のいわゆる「バックラッシュ 」から現在につながる道徳的保守勢力からの批判や攻撃の歴史を踏まえた議論を行った。この議論によって、今世紀に入ってからの日本におけるジェンダーとセクシュアリティに関わる政治の側は大きく変化したように語られることがあるにもかかわらず、それらの変化への対抗勢力は基本的に一貫して変わっていないこと、そこで問題になるのは「伝統的家族」とそれを崩壊させるものとして位置付けられる「性的マイノリティ」とであること、そしていわゆる「ダイバーシ

ティ」や「LGBT ブーム」が指摘される昨今も性的マイノリティの権利運動へのバックラッシュは少しずつ強められてきていること、などが確認された（公開研究会「道徳的保守と性の政治の20年—LGBT ブームからバックラッシュを再考する」）。
また、年度末には国際学会(SCMS)に参加し、隣接という空間的配置が身体にもたらしうる脅威やリスクと、それにもかかわらず諸身体が存在するための条件ともなる他者との関わりの必要性とについての考察から導かれる倫理的要請について、とりわけそれをポストコロニアルなジオポリティクスにおける距離や近接性 の政治的操作の問題と接続する論考を、報告した(“Manipulated Distance and the Refusal of Touch”, SCMS2018（国際学会）)。
(3)2018 年度および最終年度は、一方で引き続き「LGBT 運動」とセクシュアリティの政治が、一方でオリンピックを前提とする東京都のネオリベラルな開発要請、他方で戸籍に基づく従来の家族制度の変更を強く忌避する道徳的保守層を支持基盤とする政府の方針という二方向の政治とどのように交渉しているのかを分析し、国際研究会での招待講演、国内学会への招待登壇などでその結果を公表した（“Marriage Equality as Strategy: Family Registration, Moral Conservatives, and the “LGBT” Fad in Japan”, “Queering Japan” Conference（国際学会、招待登壇）;「《エスニック・フェア》のダイバーシティ：可視性の政治を巡って」、2018 年日本女性学会シンポジウム（招待登壇）;「多様性の可視化がもたらす意義と課題–クィア・ポリティクス、商品化、そしてインターセクショナリティ」、日本スポーツとジェンダー学会第 18 回大会（基調講演）;“LGBT diversity and the queering of Tokyo”, Inagaki 11 Seminar at University of Melbourne（招待講演））。
並行して、身体の近接性と連帯についての研究を進め、とりわけ非規範的身体にとっての物理的近接の不可避性とそのリスクが、多様に異なる諸身体の共存可能性にどのように関わり、どのような連帯を促すのかについて考察を行った(「非規範的･非典型的身体とダイバーシティの他者」、2018 年度政治思想学会シンポジウム III「近代の統治権力とアイデンティティ・他者」（招待登壇））。また、米国から研究者を招聘し、この点を主題とする国際研究集会を開催した（「ジュディス・バトラー教授講演“Bodies that Still Matter”」）。
同時に、2018 年以降に世界各地で観察されるようになったフェミニストやレズビアン女性の一部によるトランスジェンダー女性に対する攻撃の日本におけるあらわれについて考察し、これを今世紀の日本でのジェンダー／セクシュアリティの政治が多様な諸身体をどのように扱ってきた（扱い損ねてきた）のかという文脈に位置付けた発表を行うとともに（“‘Imported’ Feminism and ‘Indigenous’ Queerness: From Backlash to Transphobic Feminism in Transnational Japanese Context”(UC Berkeley における招待講演;“From Backlash to Online Trans-exclusionism: Response to the lecture by Prof. Peto”,Gender and Sexuality: *Journal of the Center for Gender Studies*, No.15)、近接性と連帯という観点からトランス排除の問題を分析する論文を発表した（「埋没した棘—現れないかもしれない複数性のクィア ・ポリティクスのために」、『思想』No. 1151）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 SHIMIZU, Akiko	４．巻 15
２．論文標題 "From Backlash to Online Trans-exclusionism: Response to the lecture by Prof. Peto”	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Gender and Sexuality: Journal of the Center for Gender Studies	６．最初と最後の頁 59-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 清水晶子	４．巻 1151
２．論文標題 「埋没した棘――現れないかもしれない複数性のクィア ・ポリティクスのために」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 思想	６．最初と最後の頁 35-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 清水晶子	４．巻 5月号
２．論文標題 ダイバーシティから権利保障へ：トランプ以降の米国と「LGBTブーム」の日本	５．発行年 2017年
３．雑誌名 世界	６．最初と最後の頁 134-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　6件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 清水晶子
２．発表標題 「《エスニック・フェア》のダイバーシティ：可視性の政治を巡って」
３．学会等名 2018年日本女性学会シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 清水晶子
２．発表標題 「非規範的・非典型的身体とダイバーシティの他者」
３．学会等名 2018年度政治思想学会シンポジウムIII（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 SHIMIZU, Akiko
２．発表標題 “Marriage Equality as Strategy: Family Registration, Moral Conservatives, and the “LGBT” Fad in Japan”
３．学会等名 “Queering Japan” Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 SHIMIZU, Akiko
２．発表標題 Manipulated Distance and the Refusal of Touch
３．学会等名 SCMS2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 SHIMIZU, Akiko
２．発表標題 “The Translation of Politics: Introucing Queer Theories to Japan”,
３．学会等名 Crossroads in Cultural Studies Conference 2016（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 清水晶子
２．発表標題 クィア・スペースとその行方：トランプ当選と2020の間に
３．学会等名 岡山大学文学部プロジェクト研究「社会運動とジェンダー／セクシュアリティの変容に関する分野横断的研究」公開セミナー（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 清水晶子
２．発表標題 「多様性の可視化がもたらす意義と課題:クィア ・ポリティクス、商品化、ハイパー・ヴィ ジビリティ」
３．学会等名 JSSGS2019 年度学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 SHIMIZU, Akiko
２．発表標題 “From Backlash to ‘LGBT’ Movement and Beyond: The Moral Conservatives and Feminist/Queer Left Politics in Japan”
３．学会等名 ECPG2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 SHIMIZU, Akiko
２．発表標題 “LGBT Diversity and the Queering of Tokyo”
３．学会等名 Inagaki 11 Seminar, University of Melbourne（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 SHIMIZU, Akiko
２．発表標題 “‘Imported’ Feminism and ‘Indigenous’ Queerness: From Backlash to Transphobic Feminism in Transnational Japanese Context”
３．学会等名 Berkley Visiting Scholar Lectures series（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 中央大学人文科学研究所編（共著）	４．発行年 2019年
２．出版社 中央大学出版部	５．総ページ数 222
３．書名 『読むことのクィア―続・愛の技法』	

１．著者名 清水晶子	４．発行年 2016年
２．出版社 フィルムアート社	５．総ページ数 350
３．書名 『社会の芸術／芸術という社会』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考